

インターネット公開許諾のない文章には
墨消し処理を施しています。

浄土宗教判説の一考察

―特に岡師判を中心として―

三宅博道

岡師は浄土一宗の教判として「釈浄土二藏義」に「三師教相義」を明かし、曇鸞の難易二道判、道綽の聖浄二

門判及び善導の二藏二教判を掲げている。

この中、元祖は立教開宗にあたり「選択集」の才一章に道綽の聖浄二門判をもつて浄土宗の教判とする旨を明している。即ち、此土入聖、自力難行、時機不相応の聖道門を今時難証として選捨し、往生浄土、他力易行で、しかも時機相応し百即百生の浄土門を易証の法門として拾取されたのである。

一方、問師は直接元祖判に依らずして善導の二藏二教判に立脚し、問師独自の五分教判を編みだした。即ち、一大聖教を二分して声聞藏菩薩藏とし、小乗を声聞藏に判し、大乘を菩薩藏に配す。更に菩薩藏を漸頓二教に分け、漸教を細分して初分、後分とするも、共に次才階位を経て漸次に仏道を成ずるが故、漸教と名づける。一方、次才階位を借らずして頓速に往生するを頓教と名づくるも、更にこれを細分して性相二頓に分判し、唯理唯性の華天禪密を性頓とし、事理縦横、即相不退、頓中頓の浄土宗を相頓とし、これをもつて最深勝なる大法門なりとするのである。

祖師の教判を眺める時、大別して二通りの系統に区分

することができる。その一は曇鸞の難易二道判、かつ難易二道判を根底とし、時機相応論に立脚してそれを集大成し立教された道綽の聖浄二門判であり、他の一は善導の二藏二教判である。前系統を所依とされたのが元祖判であり、後の系統を依憑されたのが問師の五分教判である。

かくの如く見るに、両系統の教判は互に背反關係をなすかの如く受けとられるが、正しくは両者は終局において同意と見なければならぬ。以下、両系統の教判の關係を見ることにする。

元祖はあくまでも選択的態度の上に分判されたものであるから、元祖判は選択的分判と考えられる。即ち、一大仏教を聖道浄土の二門に分け、聖道門を時機不相応、難証の法門とし、浄土門を時機相応、易証の法門とし両者を並列的に対比し、二者択一的に浄土法門を選取されたのである。而して元祖判には浄土宗の深勝性、優勝性を説くに至らなかつたのである。爾来、浄土列祖は浄土宗が他宗に対し超勝することを願わさんと努められたのである。

元祖が浄土一宗を開宗されて後、二祖三祖により宗義の綱格が形成されていったのであるが、三祖以後はその宗勢あまり振わず沈黙を保ち、単に白旗流によつてこれを継承持續していつたと云うにすぎなかつた。

浄土宗のこのような実情に対して旧仏教の天台、真言はなお教勢の衰えを見せず、新來の禪門は民衆によく調和し、浸透して一大天下を風靡する勢力をもたらしただである。

かくして浄土宗は、他宗からは存在価値を認められず、非難攻撃を受ける立場となり、特に禪宗からの論撃は強烈なものであつた。この時に問師世に出て、真向から扶宗的立場から他宗に対決を志したのである。その表われが問師の二大遺業である。即ち、一つに伝法の確立があり、二つに問師判の確立がそれである。これ実に師を中興の祖とするに至つた所以である。

問師判確立に至るまで、かくの如き時代的背景のあつたことを見逃がしてはならない。即ち華天禪密ことごとく自ら頓教なりと主張するに對し、問師はそれらを頓教と認めながらもなお漸の域を脱し得ずとして性頓とし浄

土宗こそ最深勝なる大法門として華天禪密を打破されたのである。

問師が浄土最勝を判じられたのは、問師の独創ではなく、問師以前に諸師によつて説かれたところである。即ち、諸師が元祖判の上に浄土門最勝を説かんとし、善導の二蔵二教判を元祖判に結びつけようと試みられた。

元祖は「無量寿經釈」に

天台真言皆名頓教、然彼断惑証理故猶是漸教也。明未断惑凡夫直出過三界長夜者偏是此教。故以此教為頓中之頓也

と述べ、二祖は「浄土宗要集」に「頓教一乘事」の章を設け、共に浄土宗頓中頓を明している。更に証円も「浄土十勝論」に、浄土宗をもつて「真実究竟上大乗頓教」と述べられている。これら諸説は共に浄土宗の優勝性を顕現せんとするものである。

問師は諸師の頓中頓説を依憑し、善導の二蔵二教判を細分して五分教を確立し、元祖判の上に浄土門深勝性の趣旨を組織づけられたのである。かくして二蔵二教判は問師の五分教確立に至り浄土宗教判としての完全な絶対

的な価値を産み出したのである。

法然上人の念仏義と門下の論点

森 野 現 弘

日本に於て浄土教が仏教全体の中に独立的に主張されて来たのは、法然上人の時代即ち鎌倉時代頃である。法然以前の浄土教としては、その源は古く中国の曇鸞、道綽、善導等の師によつて開かれ、かような中国浄土教を背景基盤として日本浄土教の姿が現れたのである。結局、この当時の浄土教と云えば、日本仏教の初期に当り真言、天台の時代、云はば南都北嶺の浄土教と云うことになる。そして我国でも仏教美術が次第に発達して、寺院の建立が盛んになり、日本浄土教の発展の原因となつたのである。そしてここに法然なる僧が現れ日本浄土教の地位を確立せしめ、念仏を申すことによつて、彌陀の浄土に往生することを説き、仏願に順ずる才十八願所誓の称名念

仏の一行を立てられたのである。

このように法然は念仏をもつて一宗の形式を作つた。これ即ち浄土宗の起源である。然し、法然は念仏を広めるに当つても全く他の經文を否定されなかつたのであつて、念仏は單なる日課として毎日数万遍の称名念仏の行を修したから、源空に対して帰依した人々は一般民衆ばかりでなく皇靈や朝廷から盜賊や遊女に至るまですこぶる多く、特に兼実の爲には法然は「選択本願念仏集」を選述して浄土宗念仏の教の大綱を示した。そこで問題となるのは法然は念仏と他の經文との關係についてどの様に見られてゐるかと云う事であるが、念仏と非常に密接な關係をもつものは円戒で、選択集によれば、布施持戒はこれ雜行として選擇すべきことを説いている。即ち「今選擇前布施持乃至孝養父母等諸行而選擇專称仏号。——(中略)——然則彌陀如来法藏比丘之昔被催平等慈悲為晉攝於一切不以造像起塔等諸行為往生本願唯以称名念仏一行為其本願也。」と記されてあり、當時は造像起塔や持戒持律が尊敬され、智慧高才や多聞多見を求める為に出家する人達